

# 探訪 北の風景 25

## 函館朝市 函館市

青木和弘

JR函館駅の西隣に函館朝市がある。3ヘクタール（約1万坪）の敷地に約250店が営業し約1000人が働いている。北海道新幹線開通後、初めての観光シーズン到来に、大きな期待を寄せる。近年、施設の改築や魅力づくりが目を引く。海鮮井や活イカで人気の「どんぶり横丁市場」。活イカの釣り堀があり、ワンコイン（500円）で海鮮の五色丼などが食べられる「えきに市場」。一昨年3月に新築した「函館朝市ひろば」には広い休憩・飲食スペースがある。これらは屋内店舗なので、冬でも雨天でも安心して利用できる。もちろん朝市仲通りや巴通りに路面店が軒を連ね、

「塩干（えんかん）市場」や「きくよ食堂」などの有名店もある。

函館朝市は1945年（昭和20年）、食糧難の終戦直後、近郊の農家が列車で野菜を運び、函館駅前広場の片隅で立ち売りを始めたのが発祥。青函連絡船で青森からは統制品の米も持ち込まれ、鬧市の一部とみなされた。梱包用の新聞紙が散乱し、露店取引追放運動に発展することもあったという。

1949年、統制経済が解かれ、当時の函館、亀田、上磯、七飯、大野の5農業協同組合が渡島農業協同組合連合会を設立。翌年、国鉄の行商列車再開に合わせ、鉄道荷さばき所前に朝市を開設し、その後市役所横に移った。記録によると、54年当時、野菜生産者の行商人は600人から700人いた。さらに、鹿部、砂原、森方面から、「ガンガン部隊」といわれる鮮魚の行商人も集まり、平日でも1万人以上の市民が殺到した。トラブルも増えたことから、同組合連合会が朝市の管理運営を行うようになった。以来、函館朝市の担い手は協同組合である。

1956年、朝市は現在のJR函館駅西側に移転。60年代前半までに施設や道路などが整備され、現在の朝市ゾーンができ、約400軒が店を構えた。函館朝市は、名実共に、「新鮮で安い市民の台所」となっていた。

その朝市が大きくなり巻き込まれる。19



「えきに市場」の中央にある活イカの釣り堀。その場で刺身にしてくれる。料金は時価だが、この日は調理代込みで680円。1月～5月はヤリイカ、6月からはマイカになる

60年代前半から、住宅が郊外に広がり、スーパーマーケットが出店。対面販売から、陳列棚でのセルフ販売になり、消費者の意識も変化する。

追い打ちをかけたのが1975年、朝市に近い錦町に、競りを行う中央卸売市場が開場。函館朝市は野菜や鮮魚など、生鮮食料品の流通拠点の地位を失ってしまった。

それから朝市は、カニやメロンなどの土産品を扱う観光化を図っていく。1976年の米国、ソ連の漁業専管水域200カイリ宣言も痛かった。北洋漁業に大打撃を与え、漁船乗組員や市場関係者に定食を提供していた食堂も、観光客向けの営業に変化していく。

しかし、観光客から「土産を送ったが腐っていた」という苦情が寄せられるようになる。その日に食べる市民相手の商品と、日持ちが必要な観光





観光客で賑わう函館朝市の仲通り。本格的な観光シーズンを迎えて北海道新幹線による来客増加に期待が集まる

「えきに市場」2階の食堂では、5,000円で海鮮の五目丼が食べられる



函館朝市の営業時間はおおむね午前6時〜午後2時ぐらいまで。水曜定休が多いが、店舗によつて違いがある。食堂などは、数は少ないが、夜まで営業する店もある。

客向けの土産品は、加工も梱包も輸送も違う。土産用の高級品を並べる店が増えてくるに従い、「朝市は値段が高い」という不満が出て市民の足が遠のいていった。

そして、1988年の青函連絡船廃止。その前年、朝市に6つある協同組合などが結果として、函館朝市協同組合連合会を創設し、死活をかけた挑戦が始まった。キャラクター「あさいっちゃん」と「函館朝市」のロゴマークを作成。「函館朝市推奨店5カ条」もつくって啓発も図っている。①強引な客引きはしません②親切な接客態度に努めます③商品の価格と説明をきちんとしています④名刺等の連絡先をお渡ししています⑤元氣と笑顔を絶やしません」と掲げる。

いま、日本人旅行者の増加は、売り上げに直結するので、新幹線の効果に期待が集まる。